

福島古墳群（13・14号墳）

—都市公園整備事業（県立有馬富士公園）に伴う発掘調査報告書—

平成11年3月

兵庫県教育委員会

福島古墳群（13・14号墳）

—都市公園整備事業（県立有馬富士公園）に伴う発掘調査報告書—



13号墳遺物出土状況



13号墳出土異形壺瓶

例 言

1. 本書は三田市福島字鳥尾1091-2に所在する福島13・14号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、都市公園整備事業（県立有馬富士公園）に関連するもので、北摂整備局の委託を受けて、平成9年度に兵庫県教育委員会が全面調査を実施した。
3. 全面調査は、株式会社マツダ建設と諸負契約を交わして実施した。
4. 遺跡の航空測量は株式会社フジコに委託したが、それを除く調査現場での遺構等の実測・写真撮影は調査員および調査補助員が行った。
5. 出上品整理作業は平成10年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。
6. 遺物写真の撮影は（株）衣川に委託して実施した。
7. 本書の執筆・編集は池田悦子の協力を得て、鎌が行った。
8. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
9. 現地調査および整理作業の際には、関係各機関はじめ、以下の方々からご協力やご教示をいただいた。ご芳名を記して感謝の意を表す。

高島信之（三田市教育委員会） 中井秀樹（三田市教育委員会）

凡 例

1. 本書で示す標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を基とし、包囲は座標北を指す。なお、調査地の国土地標は第V系に属する。
2. 遺物には通し番号をついている。ただし、石製品・石器と金属器には、その頭にそれぞれSとTをつけて、土器と区別している。また、遺物の番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
3. 福島古墳群の地理的・歴史的環境については、同時に刊行される兵庫県文化財調査報告第192集「有馬富士公園線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 福島平唐山遺跡・福島古墳群・福島龍王谷遺跡」と重複するため、本書では省略した。
4. 調査地点位置図には国土地理院発行の1：25,000地形図「三田」を使用した。

目 次

卷頭図版 13号墳遺物出土状況／13号墳出土異形横瓶

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過	(1)
第2節 整理作業の経過	(2)

第2章 調査の成果

第1節 概要	(3)
第2節 福島13号墳	(3)
第3節 福島14号墳	(7)

第3章 まとめ	(10)
---------------	------

参考文献	(11)
報告書抄録	(14)

挿図目次

遺跡の位置

第1図 調査地点位置図

第2図 福島13号墳石室内遺物出土状況

表目次

福島13号墳出土土器一覧表(1)

福島13号墳出土土器一覧表(2)

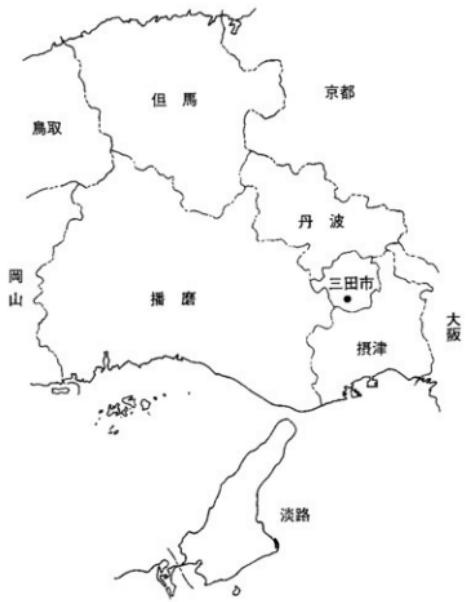
福島14号墳出土土器一覧表

図版目次

- 卷頭図版 福島13号墳遺物出土状況／福島13号墳出土異形横瓶
- 図版1 福島13・14号墳地形測量図
- 図版2 福島13号墳墳丘平面図・断面図
- 図版3 福島13号墳石室・墓壙実測図
- 図版4 福島14号墳墳丘平面図・断面図
- 図版5 福島14号墳石室・墓壙実測図
- 図版6 福島13号墳出土遺物（1）
- 図版7 福島13号墳出土遺物（2）
- 図版8 福島13号墳出土遺物（3）
- 図版9 福島13号墳出土遺物（4）
- 図版10 福島14号墳出土遺物（1）
- 図版11 福島13号墳出土遺物（5）・福島14号墳出土遺物（2）

写真図版

- 写真図版1 調査地点遠景（1）／調査地点遠景（2）／調査地点遠景（3）
- 写真図版2 調査地点遠景（4）／13・14号墳調査前全景／13号墳調査前全景（1）
- 写真図版3 13号墳調査前全景（2）／13号墳全景（西南から）／13号墳石室（西から）
- 写真図版4 13号墳石室（東から）／13号墳遺物出土状況（西から）／13号墳墳丘断面（西から）
- 写真図版5 13号墳石室（墳丘除去後・西から）／13号墳石室（墳丘除去後・西から）／
13号墳石室掘り方（西から）
- 写真図版6 14号墳調査前全景（南から）／14号墳石室全景（東南から）／14号墳石室全景（南から）
- 写真図版7 13号墳出土土器（1）
- 写真図版8 13号墳出土土器（2）
- 写真図版9 13号墳出土土器（3）
- 写真図版10 14号墳出土土器
- 写真図版11 13号墳出土鉄器／14号墳出土鉄器（1）
- 写真図版12 14号墳出土鉄器（2）／13・14号墳出土玉・石鏡



遺跡の位置

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

兵庫県が行う都市公園整備事業は、県民の多様なスポーツ・レクリエーション・ニーズに対応するために、広域公園を全県に適正に配置するものである。その中で県立有馬富士公園は、「自然休養型の文化公園」をテーマとして、三田市の有馬富士・千丈寺湖一帯の丘陵地約416haで、昭和63年度より兵庫県北摂整備局土木部・兵庫県都市住宅部公園緑地課が整備を進めてきた。

しかし、事業計画地周辺には周知の埋蔵文化財包蔵地である福島古墳群・福島龍王

谷遺跡・福島平唐山遺跡・城ヶ岡古墳群等が存在している。これまででも県道・市道有馬富士公園線の改良に伴い、福島1・2・15・22~24号墳、上野ヶ原古墳といった墳丘墓・古墳、福島平唐山遺跡・福島龍王谷遺跡等の集落跡が、兵庫県教育委員会・三田市教育委員会により調査されている。

第1期事業区域のうち、「出会いのゾーン」に設置されるインフォメーションセンター建設予定地にも、『三田市遺跡分布図』(1989)によると古墳が2基(福島13・14号墳)存在する。そのため、兵庫県教育委員会では兵庫県北摂整備局の依頼により、平成6年度に確認調査を行った(平成6年10月17日付北整(土)第909号)。その結果、2基の古墳が遺存することが確認された。

そして、事業の進捗に伴い、兵庫県教育委員会では北摂整備局の依頼により、平成9年度に全面調査を実施することになった(平成9年5月16日付北整(土)第236号)。

確認調査と全面調査は兵庫県埋蔵文化財調査事務所が行い、担当者は以下の通りである。



第1図 調査地点位置図

確認調査(平成6年度) 遺跡調査番号 940268

調査期間 平成6年11月14日

調査面積 51m²

調査担当職員 主任 山下史朗 技術職員 松岡千寿

福島13号墳については埴輪が明らかであり、墳丘と周辺を区画する平坦部があることから古墳と判断した。福島14号墳については、からうじて残存している古墳状隆起にトレチを入れ、古墳であるかどうかを確認することになった。その結果、埴丘の範囲は不明ながら、横穴式石室の一部を検出し、古墳であることが判明した。

全面調査（平成9年度） 遺跡調査番号 970228

調査期間 平成9年7月15日～9月17日

調査面積 545m²

調査担当職員 技術職員 鐵 英記 技術職員 池田征弘

協議の結果、古墳の存在する地点が公園造成に伴う切り土により失われることが判明した。そのため、平成6年度の調査成果に基づき、全面調査を実施した。両古墳とも横穴式石室を主体部とすることが確認され、須恵器・鉄器・玉等が出土した。調査前と墳丘検出後に空中写真測量を実施した。

なお、現地調査の際に、調査補助員として中村真也、耕田治の協力を得た。

第2節 整理作業の経過

調査と平行して、現地事務所で遺物の洗浄・ネーミングを行った。遺物の接合・実測・写真撮影および金属遺物の保存処理は、平成10年度に埋蔵文化財調査事務所において実施した。なお、遺物写真の撮影は（株）衣川に委託した。あわせて遺構図・遺物のトレイス・レイアウトを実施し、本文執筆をまって本報告書の編集作業を行った。

整理作業にかかわった担当者は以下のとおりである。

担当職員 主査 加古千恵子（保存処理）

主査 村上賢治

技術職員 鐵 英記

嘱託職員 池田悦子 前山三枝子 島田留里 藤 美子 位上篤子 大仁克子

木村淑子 小寺恵美子 板東明子 津田友子 森 章恵

栗山美奈 和田寿佐子 前川悦子 藤川紀子

第2章 調査の成果

第1節 概要（図版1）

今回は福島古墳群のうち、現在の福島大池に向かって延びる尾根上に南北に並ぶ2基の古墳（13・14号墳）を発掘した。いずれも横穴式石室を埋葬施設とし、円墳と考えられる。

北側に位置する13号墳は、墳頂部がくぼみ、天井石の落下と盗掘を予想させたが、墳丘そのものの残存状況は比較的良好であった。また、玄室内には須恵器・土師器・鉄器・玉といった副葬品がかなり残されていた。

それに対して、14号墳は大きく削平されており、石室そのものの破壊も進んでいた。しかし、玄室部分の床面はわずかに残されており、須恵器・鉄製品といった副葬品も予想外に残っていた。

第2節 福島13号墳

1. 墳丘（図版2）

福島大池の南側にある丘陵の稜線上に立地する。北側に向かって延びる支尾根の傾斜変換点に位置し標高は225mである。背後（南側）の緩斜面を削って平坦面をつくり出す。墳丘東裾は現道によって削平されており、墳丘の北西裾は崩落している。

墳丘の平面形は東西方向にやや長い重んだ円形を呈する。東西方向で約14m、南北方向約12m、残存高は北側で墳丘裾との比高差1.8m、南側平坦面からの比高差1.45mを測る。盛土は基本的に明黄褐色細砂からなり、地山整形や石室掘り方の掘削に伴う土を利用している。

墳丘の築造は、最初に丘陵稜線の高い方を削り墳丘基盤を形成する。続いて石室の掘り方を掘削する。掘り方は長方形を呈し、羨道入り口部分を通路状に短く開削する。石室が片袖式であることは掘り方の形に反映していない。次に石室の基底石を据えたあと、最初の盛土を行う。その後は石室の構築にあわせて、盛土を行い、石室の左右で若干のズレが認められる。

2. 埋葬施設（図版3）

右片袖の横穴式石室である。開口方向は西で、約15度南へ振る。天井石はすべて崩落していた。玄室長は3.8m、玄室幅は奥壁で1.6m、玄門部で1.8mを測る。玄室の高さは南側壁の残存状況から推定して1.8m程度であったと考へる。

奥壁に使用された石材は、厚みもなく小型のものである。これに対して、側壁は比較的大きな石材を使用し、隙間を小型の石材で埋めている。袖部には2方向に面を持つ直方体に近い石を使用し、その対面にも大型の石材を使用して玄室と羨道を区別する。玄室の基底部には目地を通そうとする意識が認められる。

羨道は入り口付近が失われ、玄室と同様に天井石が落ち込んでいた。現存長は3.8m、幅は袖部で1.05m、開口部で1.4mを測る。平面形態は開口方向に向かって広がる漏斗状を呈する。閉塞石は袖部から開口部にかけて約1.5mの範囲で認められた。30×40cm程度の平たい割り石が用いられ、床面からの高さ30~40cmの最下段だけが残されていた。玄門部から墳丘裾にかけて幅30~60cm、長さ6.3mの素掘りの排水溝がある。

3. 遺物の出土状況

墳丘周辺

墳丘周辺では、主として墳丘の南側から開口部のある西側にかけて土器が出土している。出土した土器には須恵器の壺・瓶・大型甕等と土師器の椀がある。検出された須恵器のうち、壺・瓶といった小型品には石室内の須恵器と接合する個体も含まれており、土師器の椀も同種の椀が石室内で確認された。これらは盗掘あるいは石室の再利用に伴って石室外に持ち出されたものと考えられる。大型の甕2個体のうち、1個体は羨道部・前庭部の埋土から破片が検出されており、羨道部に据えられていた可能性もある。残りの1個体は、墳丘南側部を中心に検出されたことから、当初から墳丘上に置かれていたものと考えられる。

また、完形品ではあるが著しく歪んだ壺のセット(17・18)が羨道の南側、墳丘内に並べて埋納されていた。最初の盛土が終了した時点で据えられたものと考えられる。

石室内(第2図)

玄室内に天井石が落ち込み、それにともなって、盛土が石室に流入していた。玄門付近の流入土から瓦質土器(55)が出土し、一部の天井石に割られたような状況がみられる。

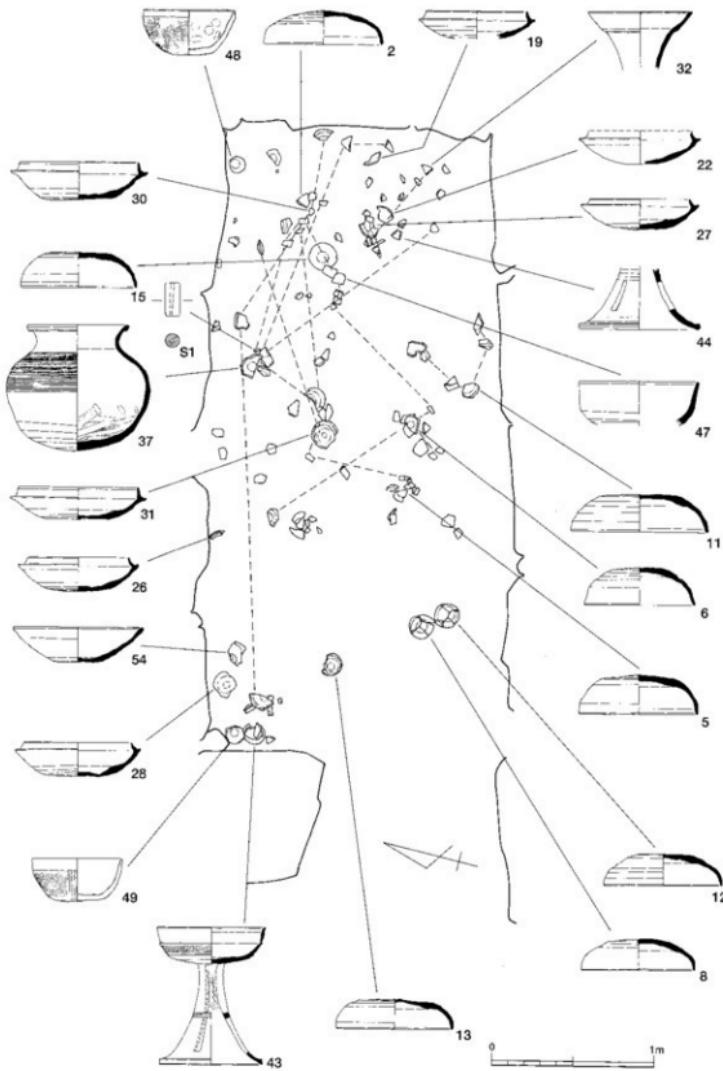
玄室床面には、須恵器を中心とする上師器・鉄製品・玉といった多くの副葬品が残されていた。玄室の奥壁側2/3と袖部の前に遺物が集中している。しかし、原型をとどめる個体は少なく、光形に近い杯蓋・杯身であっても、セット関係をうかがわせるような状況で出土したものは皆無である。したがって、本来の位置を保つものは少ないと考えられる。遺物の接合状況をみると破片が玄室の中でもかなり分散している。また、玄室内にとどまらず、羨道あるいは墳丘裾部・前庭部から出土した破片とも接合する個体も認められる。鉄器・玉は奥壁の前で見つかっている。また、束縛系の須恵器椀が袖石前の床面で検出された。

4. 出土遺物(図版6~9・11)

古墳時代の須恵器(1~47・51・52)

1~17は杯蓋である。犬井部と口縁部との境界に明瞭な稜線を持つ個体は1だけである。残りの個体は全体に丸みを帯び、稜線による犬井部と口縁部の区別が認められない。調整技法からみて、回転ヘラケズリは犬井部に施されるだけであり、なかには9・10といった回転ヘラケズリを省略する個体も現れている。口縁端部も内傾する面を有する個体と丸く納める個体がある。法量は口径が13~16.65cm、器高が3.7~4.85cmの範囲に分布している。形態・法量とともにバリエーションがあり、複数型式が存在している。1~7は墳丘の前庭部から墳丘南側部で出土している。5・9・14は玄室と羨道部で破片が検出された。17は先述したように18と一緒に墳丘内から出土した。残りの個体については、全て玄室で検出されている。

18~31は杯身である。カエリが直立気味で長い個体と内傾し短くなる個体が認められる。底部についても丸みを帯びたものと平底化しているものが混在している。調整技法の点では、回転ヘラケズリの施される範囲は狭くなってしまい、21・29のように回転ヘラケズリを省略する個体も現れている。法量は口径が12.3~16.55cm、器高が3.85~4.7cmの範囲に分布している。杯蓋と同じく形態・法量とともにバリエーションがあり、複数型式が存在している。23・26は玄室と羨道閉塞部から、24は玄室・羨道閉塞部と前



福島13号墳玄室内出土状況

底部から、29は前庭部から出土している。残りの個体については、全て玄室で検出されている。

32は竈と思われる。口縁部のみ残存する。回転ナデを施し、口径12.5cmを測る。玄室から出土した。

33~38は壺である。33は扁球状の体部を持ち、丸底である。体部外面はヘラケズリ、体部は回転ナデで成形する。埴丘西側で出土した。34は平底気味で、扁球状の体部に短く直立した口縁が付く。底部外面にはヘラケズリ、体部には回転ナデを施す。35は肩の張った体部と丸底を持つ。底部内面には青海波状の當て具痕跡が残る。体部下半にカキ目を施す。36はやや肩の張った体部と丸底を持つ。底部にヘラケズリ、体部に回転ナデを行った後、体部外面全体にカキ目を施している。37は扁球状の体部と丸底を持ち、外反する口縁部が付く。底部外面にはヘラケズリを施す。体部から口縁部は回転ナデを施し、体部上半にカキ目を施す。38は肩の下がる体部に直立気味の口縁部が付く。頸部半ばと肩部に凹線を巡らせる。頸部にはヘラ記号も認められる。35は玄室・羨道閉塞部と前庭部から、37は玄室から、残りの個体については、全て埴丘南裾部から埴丘西側にかけて出土している。

40は平たい太鼓状の体部に直立する短い口縁が付く土器である。残存状況は悪い。体部の前面・側面・背面のそれぞれに連続する櫛描き刺突紋を巡らせる。異形横瓶と仮称する。玄室・羨道閉塞部・前庭部から出土している。

39・41・42は提瓶である。いずれも残存状況が悪い。39は軽く内彎して立ち上がる口縁部である。41・42は体部にカキ目を施す。耳は鉤形だが、41のものは形態化が始まっている。全て埴丘南裾部から埴丘西側にかけて出土している。

43~46は高杯である。46以外は長脚2段透かしタイプで、脚部中央に凹線を巡らせている。43は唯一坏部が残存しており、坏部側面には連続する櫛描き刺突紋を巡らせる。坏部底面にはヘラケズリを施す。脚部内面には絞り目が明瞭に残る。46は浅い皿状の坏部に柱状の脚が付く。坏部底面にはヘラ切り後、ナデを施す。43は玄室の袖部から、44・45は羨道の閉塞部から、46は埴丘南裾部から出土している。

47は直立気味に立ち上がる体部を持つ深い碗である。体部は回転ナデ、底部には回転ヘラケズリを施す。底部の大部分を欠くが、短い脚が付く可能性がある。玄室から出土した。

51・52は大型の壺である。肩の張った体部を持ち、口縁部は外反する。口縁端部を外側に肥厚させる。体部はタタキによる成形を行い、内外面に當て具とタタキ板の痕跡が残る。体部外面にはカキ目を施す。51は埴丘南裾部から前庭部と羨道部埋土から出土した。52は埴丘の南裾部を中心に、一部埴丘西側からも出土した。

古墳時代の土師器（48~50）

やや丸みを帯びた平底を持つ深い碗である。48・49は外面には継あるいは斜め方向のハケ目を施し、口縁端部はやや強いヨコナデを行う。内面はユビナデとユビオサエを施している。50はかなり丸底気味になっている。器面の磨滅が著しく、調整は不明である。48は玄室北東隅で奥壁に添って出土した。49は玄室北西隅の袖部で、50は埴丘南裾から出土した。

その他の土器（53~55）

53は平底から内彎して立ち上がる口縁部を持つ杯身である。口縁部から体部は回転ナデを施し、底部はヘラ切り後未調整である。最終段階の追葬に伴う土器である可能性もある。埴丘西南部と前庭部埋土から出土した。

54は高台を持たない平たい底部と直線的に開く口縁部を持つやや偏平な碗である。見込み部には凹みが僅かに残る。底部外面に回転糸切りの痕跡が残っている。玄室の袖部から出土した。

55は内壁する体部を持つ瓦質の羽釜である。体部中央に下方に傾いた鋤が付く。鋤と口縁部のあいだには偏平な把手が付いている。把手は2個1組であったと思われる。現存する把手には2個の孔が並列して穿たれている。うち、1個には鉄線様のさびが付着している。玄室羨道部の埋土から出土した。

鉄製品（T 1～T 7）

T 1～T 6は鉄鐵である。いずれも短頭鐵で、厚みが薄く、平造りである。T 1・T 2は逆刺があり目立たず、T 3は浅い逆刺を持つ。T 1は残存長3.55cm、幅2.55cm、厚さ0.4cmを測る。T 2は残存長2.65cm、厚さ0.35cmを測る。頭部の一部が残っており、幅0.8cmを測る。T 3は頭身長5.8cm、厚さ0.4cmを測る。T 4～T 6は深い逆刺を持ち、鐵身部は湯抉柳葉形である。T 4は残存長5.8cm、幅2.15cm、厚さ0.25cm、頭部幅0.7cm、厚み0.35cmを測る。T 5は残存長6.15cm、幅2.0cm、厚さ0.25cm、頭部幅0.7cm、厚み0.2cmを測る。T 6は残存長5.5cm、幅2.15cm、厚さ0.35cm、頭部幅0.65cm、厚み0.3cmを測る。

T 7は刀身の一部と考えられる。残存長5.0cm、身部の幅2.0cmを測る。

玉（S 1）

チャートに似た石材を用いる管玉である。わずかな欠損があるものの、ほぼ完形である。玄室の奥壁よりの床面から出土した。長さは2.8cm、直径1.12cm～1.15cm、穿孔の直径0.12cm～0.3cmである。穿孔は一方向から行っている。

石鐵（S 2）

平面形が三角形を呈する四基式の石鐵である。先端を欠損する。調整剝離によって全面が覆われている。残存長2.15cm、最大幅1.4cm、厚さ0.5cm、重さ1.1gを測る。灰色のチャート製である。玄室の床面から出土した。

第3節 福島14号墳

1. 墳丘（図版4）

13号墳の南約35m、標高226mの地点に位置する。周囲の地形は大幅な改変を受け、特に古墳南半分はグランド状の平坦な広場の一部となっていた。そのため、築造当初の地形を知ることが困難である。ただし、13号墳との比高差がほとんど無いことから、北側に向かって緩やかに下がる平坦な尾根の稜線上に立地すると思われる。

盛土のはほとんどが削平によって失われていた。かろうじて石室北側に墳丘の一部が残されていた。盛土は主として明黄褐色の小礫混じり細砂からなり、地山を掘削した際の土を利用したと思われる。墳丘の規模は直径12～14m程度の円墳であったと考えられる。

2. 墳葬施設（図版5）

石室も大きく損壊し、玄室北側側壁の基底石3石分と床面だけが残存していた。蓋道部および玄室南側が完全に失われているため平面形は不明で、玄室の残存長は約3.5mである。側壁に用いられた石材は13号埴に比べると小さい。石室掘り方と敷石との距離が短く、奥壁の石材は13号埴と同様に薄いものであった可能性が高い。

床面には2×3.5mに範囲で敷石が認められた。敷石は偏平で大型の石材と拳大の円礫を使用している。開口方向は南で、東へ約6度振る。

出土した鉄製品中に鉄釘が含まれており、木棺が納められていた可能性が高い。

3. 遺物の出土状況

石室の破損が著しいこともあるて、出土した遺物の全てが細片と化していた。玄室床面の敷石上で検出したものもあるが、敷石の間に落ち込んでいたもののが多かった。出土遺物には、須恵器および鉄製品がある。

4. 出土遺物（図版10・11）

須恵器（56～81）

56～66は环蓋である。口径は10.9～14.1cm、器高は3.15～4.4cmの範囲に分布する。天井部と口縁部の区別ができない個体がほとんどである。口縁端部に関しては内傾する面を持つものと丸く納めるものがある。天井部に回転ヘラケズリが残るものは58・62・63・66であとはヘラ切り未調整のものが多くなる。13号埴出土のものに比べて、明らかに小型化している。すべて玄室敷石部分から出土した。

67は内側にカエリを持つ蓋である。丸くなつた天井部は頂部を欠くものの、宝珠つまみの付く器種であると考えられる。天井部には回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデを施す。玄室から出土した。

68～77は环身である。口径は10.9～11.7cm、器高は3.45～4.1cmの範囲に分布する。全般的にカエリは内傾して短くなり、受け部も矮小化している。しかし、相対的には大小2種類に分かれる。底部の形態もやや尖るものと平底化しているものがある。71・76には回転ヘラケズリが残るが、他の個体はヘラ切り後ナデあるいは不定方向のケズリを施す。环身同様小型化している。玄室敷石部分から出土した。

78・79はやや深い形状を持つ椀である。木米、蓋を伴う器種であると思われる。78は丸みを帯びた底部から内傾気味に口縁部が伸びる。体部から口縁にかけて回転ナデを施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを施す。体部と底部の境界にヘラケズリを行っている。79は丸みを帯びた底部から、明瞭な稜を持つ直立する口縁部を持つ。口縁部から体部にかけて回転ナデを施し、底部外面は回転ヘラケズリを行う。玄室から出土した。

81は偏平な体部から直線的に立ち上がる口縁部を持つ小型の短頸壺である。体部から口縁部にかけては回転ナデを施す。底部外面は回転ヘラケズリを行っている。全体に自然釉がかかっており、玄室の敷石の間に落ち込んでいた。

80は斜め上方に直線的に伸びる口縁部を持つ平底の杯身である。体部から口縁部は回転ナデを施し、底部外面はヘラ切り後未調整である。著しく歪んでいる。埴丘上と石室の東南側で出土した。

鉄製品（T 8～T23）

T 8～T17は鉄鎌である。T 8・T 9は短頭鎌で、あとは長頭鎌である。T 8は平造りの柳葉形で、鎌身長4.6cm、幅2.8cm、厚さ0.3cmを測る。T 9は平造りの柳葉形で、棘籠被が認められる。残存長6.1cm、幅2.3cm、厚さ0.55cm、籠被部の長さ1.6cm、幅0.8cm、厚さ0.5cmを測る。T 10は片丸造りの柳葉形で、棘籠被が認められる。残存長15.3cm、鎌身長3.5cm、幅0.9cm、厚み0.5cm、籠被部の長さ9.2cm、幅0.5cm、厚み0.35cmを測る。茎部に木質が残存している。T 11は両丸造りの柳葉形で、残存長7.9cm、鎌身長2.9cm、幅1.15cm、厚み0.35cm、籠被部の幅0.55cm、厚み0.45cmを測る。T 12は棘籠被をもつ頭部片である。残存長3.4cm、籠被部の幅0.4cm、厚み0.3cmを測る。T 13は鎌身部を欠く頭部片である。棘籠被が認められる。残存長13.65cm、籠被部幅0.4cm、厚み0.3cm、茎部長5.5cmを測る。茎部に糸の痕跡と木質が残存する。T 14は台形の籠被を持つ頭部片である。残存長は5.8cm、籠被部の幅0.45cm、厚み0.3cmを測る。T 15も台形の籠被を持つ頭部片である。残存長は2.05cm、籠被部の幅0.65cm、厚み0.25cmを測る。T 16は籠被部の破片である。残存長3.9cm、幅0.4cm、厚み0.35cmを測る。T 17は籠被を持つ頭部片である。残存長3.25cm、籠被部の幅0.4cm、厚み0.4cmを測る。

T 18は刀子の破片と考えられる。残存長は4.15cm、刀身の幅0.7cmを測る。

T 19は橢円形を呈する鉄製の鈎である。長径7.3cm、短径6.3cm、厚みは0.6cmである。中央の孔も橢円形で長径3.25cm、短径2.35cmを測る。

T 20～T 23は鉄釘である。断面形は長方形で、幅が0.55～0.75cm、厚みが0.4～0.5cmを測る。残存長はT 20が5.9cm、T 21が4.8cm、T 22が2.9cm、T 23が3.2cmを測り、T 21～T 23では木質が残存している。

石鎌（S 3）

凹基式の石鎌である。比較的大きな単位の調整剥離を施す。長さ1.95cm、最大幅1.9cm、厚さ0.45cm、重さ1.0gを測る。やや風化したサヌカイト製である。墳丘上の表土層から出土した。

第3章 まとめ

13号墳から出土した須恵器は、前述したように複数型式が認められる。ここでは、出土数も多く普遍的な器種である环から、それぞれの型式を考えてみたい。

环蓋の場合、一番古く位置づけられるのは、天井部と口縁部の区別がつき、口縁端部を内傾させ、天井部に回転ヘラケズリの残るものである。环身では大型で底部が扁平なものが対応する。これは田辺編年ではTK43型式に相当すると考えられる（以下の型式名も全て田辺編年による）。陶邑では小型化が始まる時期であるが、ここでは大型品が残存しており、在地産である可能性を持つ。

次に天井部と口縁部の区別が曖昧になり、口縁端部が丸みを帯びるものがくる。また形態的にはほとんど変わらないもののヘラケズリを省略するタイプのものもある。环身では立ち上がり部が内傾化し、底部が丸みを帯びたものが対応するとと思われ、こちらにも形態がほとんど同じで、ヘラケズリを省略するものが少量混じっている。基本的にTK209型式に相当すると考えられる。ただし、ヘラケズリの省略を重視するならば、TK217型式の最初期に当たる個体も含まれていることになる。

14号墳から出土した环は、蓋・身とも基本的にヘラケズリが省略されており、13号墳のものと比べて小型化しており、TK217型式の特徴を示している。また、1点ではあるが、内面にカエリを持つ口径の小さい蓋が存在する。そして同様の蓋と組み合わされたと思われる椀も2点出土している。これらはいわゆる环Gにあたり、TK217型式でも後出する要素である。福島古墳群中では15号墳で环Gを主体とする副葬が認められることから、14号墳における环Gは追葬に伴うものである可能性がある。また、环蓋で口径が14cmを超えるもの、环身で口径が12cm近くある大型品が含まれており、13号墳出土のものと同じく在地産であることを示す特徴であろう。

したがって、13号墳の初葬はTK43型式段階で、土器の変化から見て、1～2回程度の追葬が行われたと考えられる。14号墳の初葬は確実にTK217型式段階に入っており、13号墳の最後の追葬より1段階新しいものである。

このように出土した須恵器の形式変化は、築造個所において13号墳がより尾根の先端に近い場所を占める事、大きく破壊されているとはいえ14号墳の石室は13号墳に比べてやや小型化している事とも矛盾していないと考えられる。

引用・参考文献

- 田辺昭三 『陶邑古窯址群I』 平安学園考古クラブ 1966
- 田辺昭三 『須恵器大成』 角川書店 1981
- 飯塚武司 「後期古墳出土の鉄鏡について」 『東京都埋蔵文化財センター研究論集5』 1987
- 中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』 1995
- 古代の土器研究会 『第5回シンポジウム 7世紀の土器』 1997
- 古代の土器研究会 『古代の土器5-2 7世紀の土器(近畿西部編)』 1997
- 兵庫県教育委員会 『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)』 1987
- 兵庫県教育委員会 『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)』 1988
- 兵庫県教育委員会 『高山古墳群』 1991
- 兵庫県教育委員会 『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書III』 1993
- 兵庫県教育委員会 『西脇古墳群-山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XV』 1995
- 兵庫県教育委員会 『有馬富士公園線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1999
- 三田市教育委員会 『三田市埋蔵文化財分布地図』 1989
- 三田市教育委員会 『さんだのいせき11~25 ミニ・ミニ企画展じゅうさん~じゅうご』 1996

13号出土土器一覧表(1)

単位はcm: ()は復元・推定値

番号	種別	器種	口径	器高	その他の記述	焼成	備考
1	須恵器	壺蓋	(13.00)	4.40			
2	須恵器	壺蓋	14.35	4.10			
3	須恵器	壺蓋	(14.70)	4.55			
4	須恵器	壺蓋	14.15	4.20		不良	
5	須恵器	壺蓋	14.35	4.85			ほぼ完形
6	須恵器	壺蓋	13.30	4.60			
7	須恵器	壺蓋	14.00	4.25			
8	須恵器	壺蓋	13.75	3.95		不良	
9	須恵器	壺蓋	13.70	4.30			
10	須恵器	壺蓋	(14.00)	3.35			
11	須恵器	壺蓋	16.65	4.0			
12	須恵器	壺蓋	14.25	3.95		不良	ほぼ完形
13	須恵器	壺蓋	14.10	4.65			
14	須恵器	壺蓋	16.35	(4.45)			
15	須恵器	壺蓋	13.95	4.40		不良	ほぼ完形
16	須恵器	壺蓋	14.90	4.30		不良	
17	須恵器	壺蓋	14.00	3.70			完形
18	須恵器	壺身	12.55	4.55			ほぼ完形
19	須恵器	壺身	12.30				やや不良
20	須恵器	壺身	(12.8)				
21	須恵器	壺身	12.20				
22	須恵器	壺身	12.60	3.90		不良	
23	須恵器	壺身	12.60			不良	
24	須恵器	壺身	12				
25	須恵器	壺身	(12.40)	4.50			
26	須恵器	壺身	(12.30)	4.30			
27	須恵器	壺身	12.10	3.85		不良	
28	須恵器	壺身	13.10	4.25		不良	
29	須恵器	壺身	(12.60)	9.95			
30	須恵器	壺身	14.45	4.0			
31	須恵器	壺身	14.55	3.95			ほぼ完形
32	須恵器	壺	(12.50)				
33	須恵器	壺			胴部最大径 (11.80)		底部にヘラ 記号
34	須恵器	短颈壺	(7.90)	9.45	胴部最大径 15.65	やや不良	
35	須恵器	壺			胴部最大径 (16.0)		
36	須恵器	壺			胴部最大径 18.15	不良	
37	須恵器	壺	(12.10)	15.55	胴部最大径 17.65	不良	
38	須恵器	壺	(11.05)			不良	
39	須恵器	提瓶	5.40			不良	
40	須恵器	異形横瓶	(3.90)	13.00	胴部径 10.25、 胴部厚 9.1		
41	須恵器	提瓶			腹径 12.90		
42	須恵器	提瓶			腹径 (14.80)		
43	須恵器	高环	13.10	17.05	底径 (12.60)		
44	須恵器	高环			底径 15.00		

13号墳出土土器一覧表(2)

単位はcm: ()は復元・推定値

番号	種別	器種	口径	器高	その他の記述	焼成	備考
45	須恵器	壺					
46	須恵器	壺	13.00				
47	須恵器	壺	14.50				
48	土師器	椀	11.00	5.55			
49	土師器	椀	11.00	5.30			
50	土師器	椀	10.35	5.40			
51	須恵器	盤	(22.00)		胴部最大径 (44.60)		
52	須恵器	甌	(22.20)	(49.50)	胴部最大径 (50.85)		
53	須恵器	壺A	11.90	3.15	底径 (7.60)		
54	須恵器	壺	15.60	4.35	底径 6.10		
55	瓦質土器	羽釜	(15.90)		胴部最大径 (24.20)		

14号墳出土土器一覧表(1)

単位はcm: ()は復元・推定値

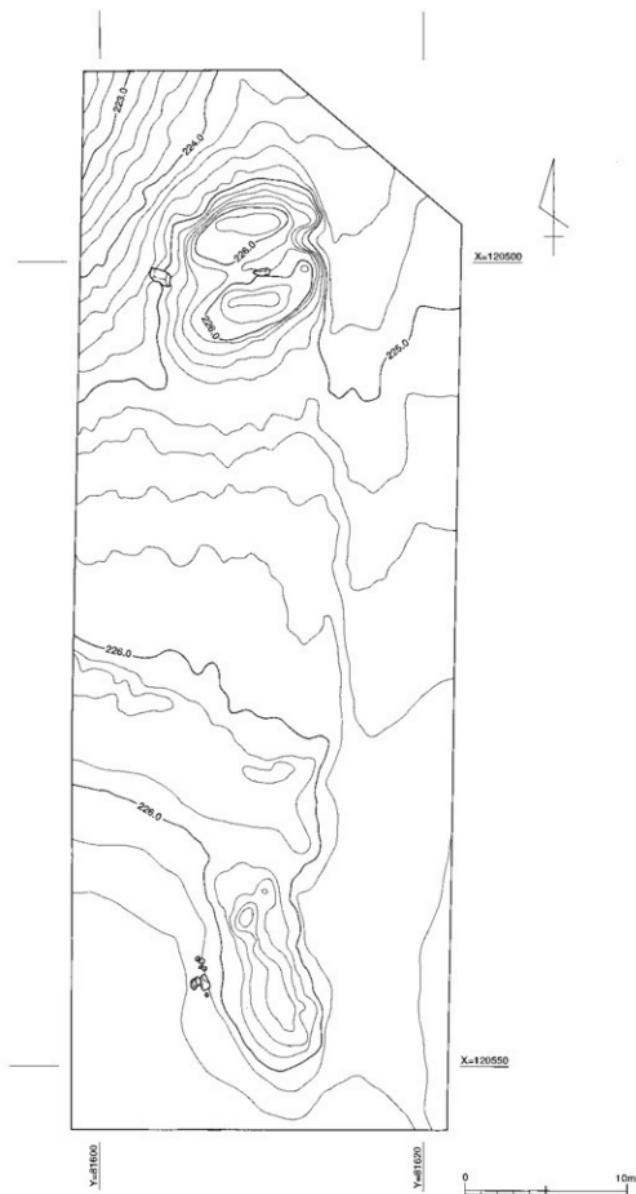
番号	種別	器種	口径	器高	その他の記述	焼成	備考
56	須恵器	壺蓋	10.90	3.65			
57	須恵器	壺蓋	12.80	3.95			
58	須恵器	壺蓋	(14.20)				
59	須恵器	壺蓋	(12.50)	3.80			
60	須恵器	壺蓋	12.75	4.40			やや不良
61	須恵器	壺蓋	(13.00)	4.30			やや不良
62	須恵器	壺蓋	(13.00)				
63	須恵器	壺蓋	(14.10)				
64	須恵器	壺蓋	(14.00)	3.50			
65	須恵器	壺蓋	(13.10)	4.00			
66	須恵器	壺蓋	(13.20)	3.15			
67	須恵器	壺蓋	9.00				
68	須恵器	壺身	10.90	3.60			
69	須恵器	壺身	(11.30)	4.00			
70	須恵器	壺身	(11.30)	3.90			
71	須恵器	壺身	11.20	3.75			
72	須恵器	壺身	(11.60)	3.80			やや不良
73	須恵器	壺身	(11.00)	3.45			
74	須恵器	壺身	11.15	3.65			
75	須恵器	壺身	11.05	3.65			
76	須恵器	壺身	(11.70)	3.70			やや不良
77	須恵器	壺身	(11.70)	4.10			やや不良
78	須恵器	椀	9.35	4.60			
79	須恵器	椀	(10.20)	4.60			
80	須恵器	壺A	13.00	3.45	底径 (8.90)		やや不良
81	須恵器	短頸壺	6.15	5.05	胴部最大径 8.25		

報告書抄録

ふりがな	ふくしまこふんぐん							
書名	福島古墳群(13・14号墳)							
副書名	都市公園整備事業(県立有馬富士公園)に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第193冊							
編著者名	鐵英記							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行年月日	西暦1999(平成11)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
福島古墳群 13号墳	兵庫県三田市 福島字鳥尾	28219	940268	34度54分	135度13分	確認調査 1994.11.14	51m ²	都市公園整備事業(県立有馬富士公園)
14号墳	1091-2		970228	52秒	36秒	全面調査 1997.07.15 ~ 1997.09.17	545m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
福島13号墳	古墳	古墳時代	横穴式石室を持つ円墳	須恵器、土師器、鉄鎌、 鉄刀、玉			異形横瓶出土	
福島14号墳	古墳	古墳時代	横穴式石室を持つ円墳	須恵器、鉄鎌、鍔、鉄釘				

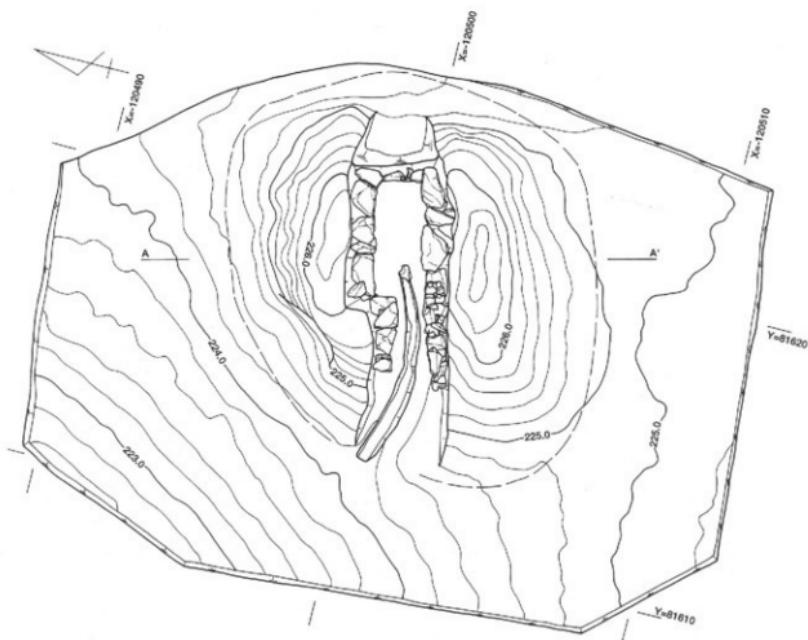
図 版

図版 1



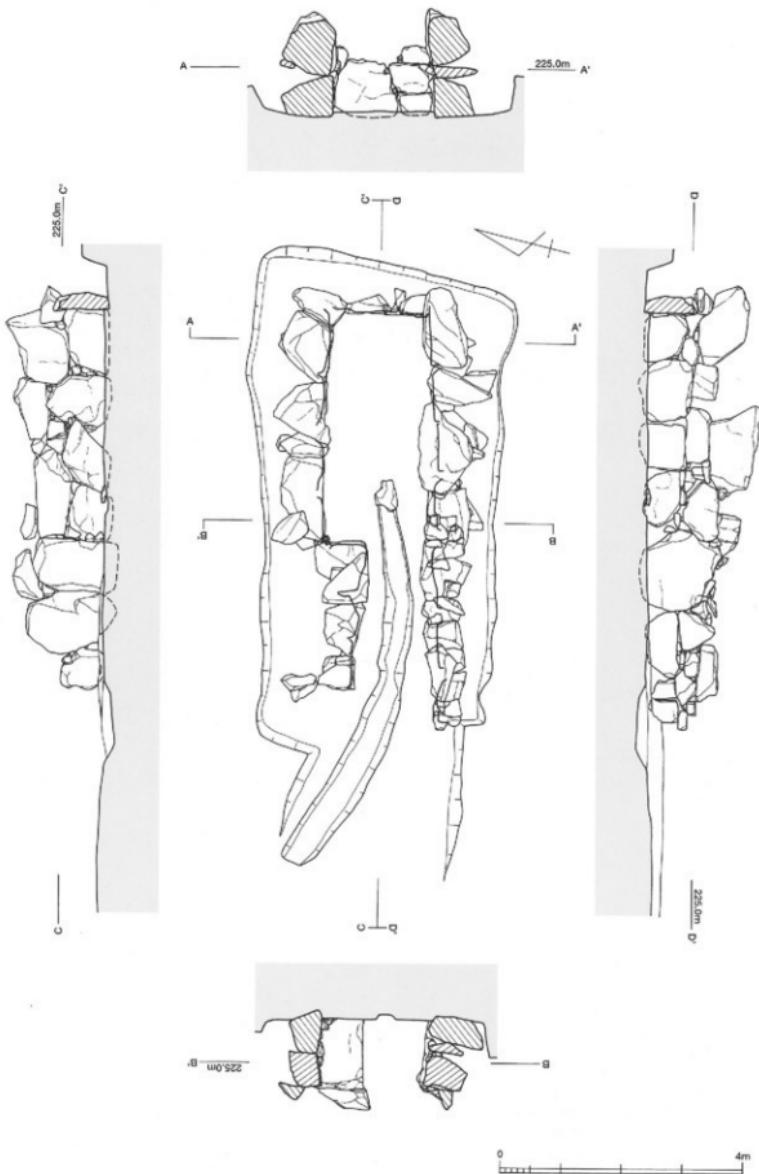
福島13・14号地地形測量図

図版 2



1. 塚土 10YR 7/6 細砂～粗砂
2. 泥土 10YR 7/6 細砂～粗砂(灰・炭化物含む)
3. 泥土 25YR 7/6～10YR 6/8 黒真粗砂～粗砂
4. 泥土 10YR 6/8 細砂～粗砂
5. 粗方粗土 10YR 6/8 細砂～粗砂(纏合土)
6. 泥土 25YR 7/6 細砂(巣糞灰)
7. 塚土 25YR 7/6 小粒混泥砂
8. 泥土 25YR 7/6 細砂(灰・炭化物含む)
9. 塚土 10YR 6/6 細砂～粗砂(灰・炭化物含む)
10. 泥土 10YR 6/8 細砂～粗砂(纏合土)
11. 粗方粗土 10YR 6/8 粗砂(乍々粘質)

福島13号墳墳丘平面断面図



福島13号墳石室墓塙実測図

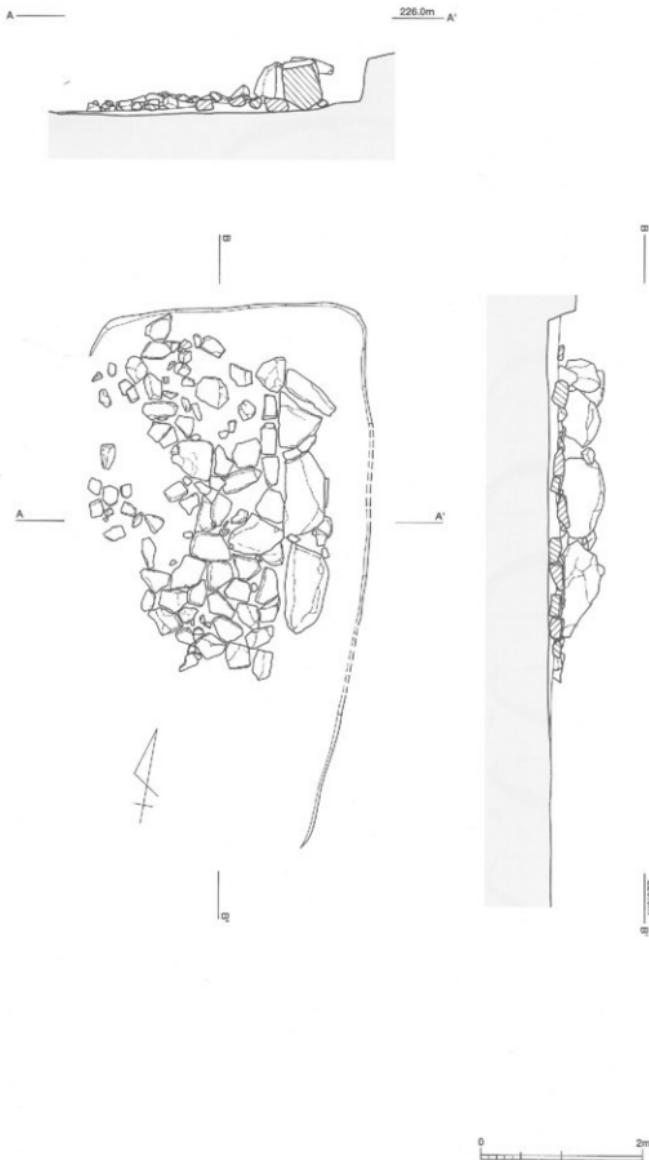
図版 4



1. 砂質調査耕土
2. 表土
3. 墓丘露出土: 10YR 7/2 小礫混り粗砂
4. 底土: 10YR 6/8 小礫混り粗砂
5. 土: 10YR 6/8 小礫混り粗砂 (炭化物・焼土含む)
6. 石室底方塊土: 10YR 6/8 粗砂～極粗砂
7. 地土: 25Y 7/6 細砂

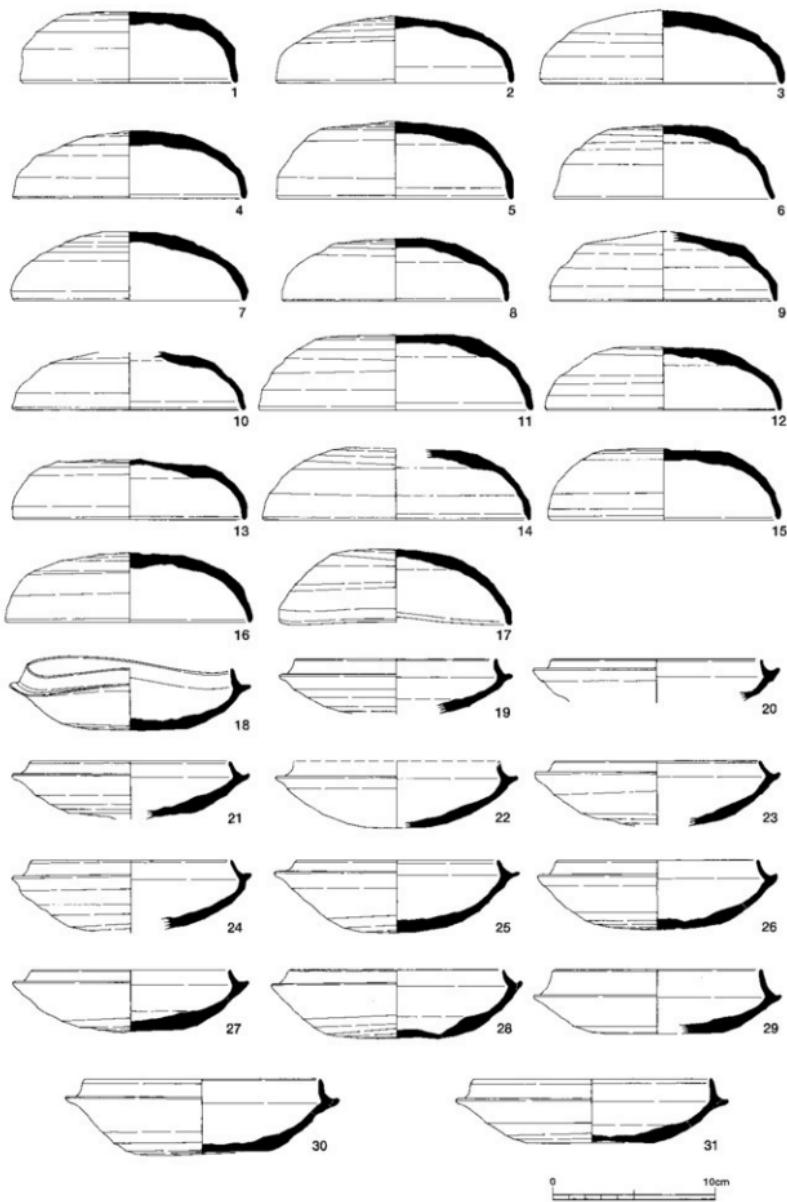
福島14号墳分丘断面図

図版 5



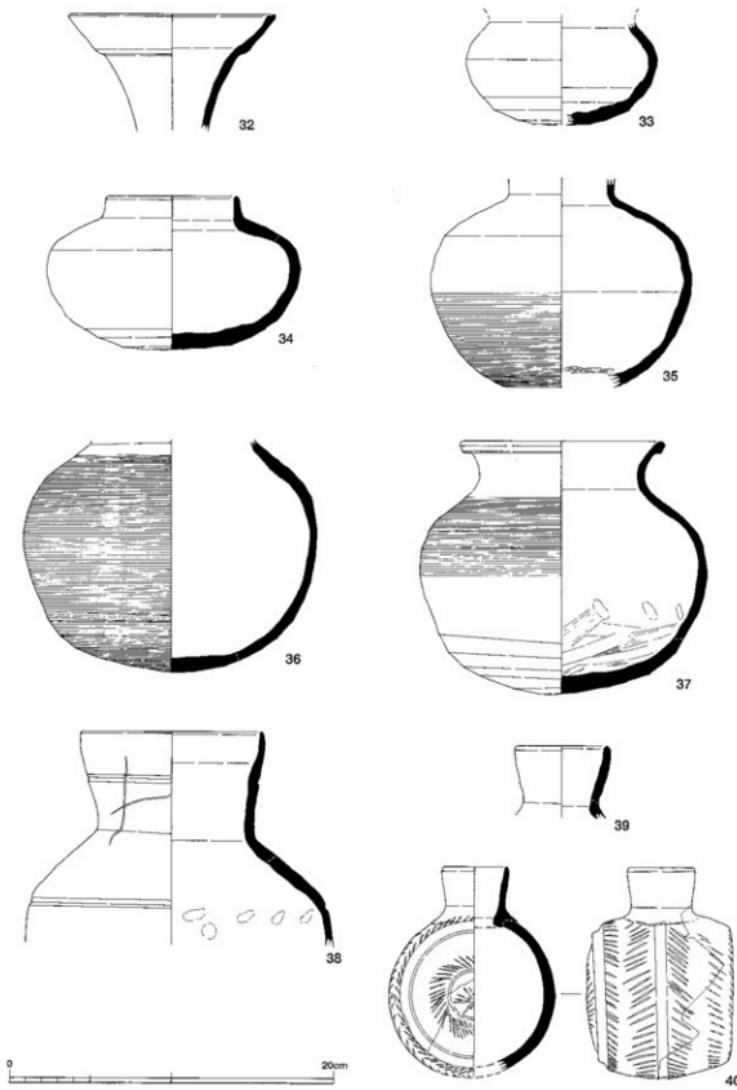
福島14号墳石室・墓塚実測図

図版 6



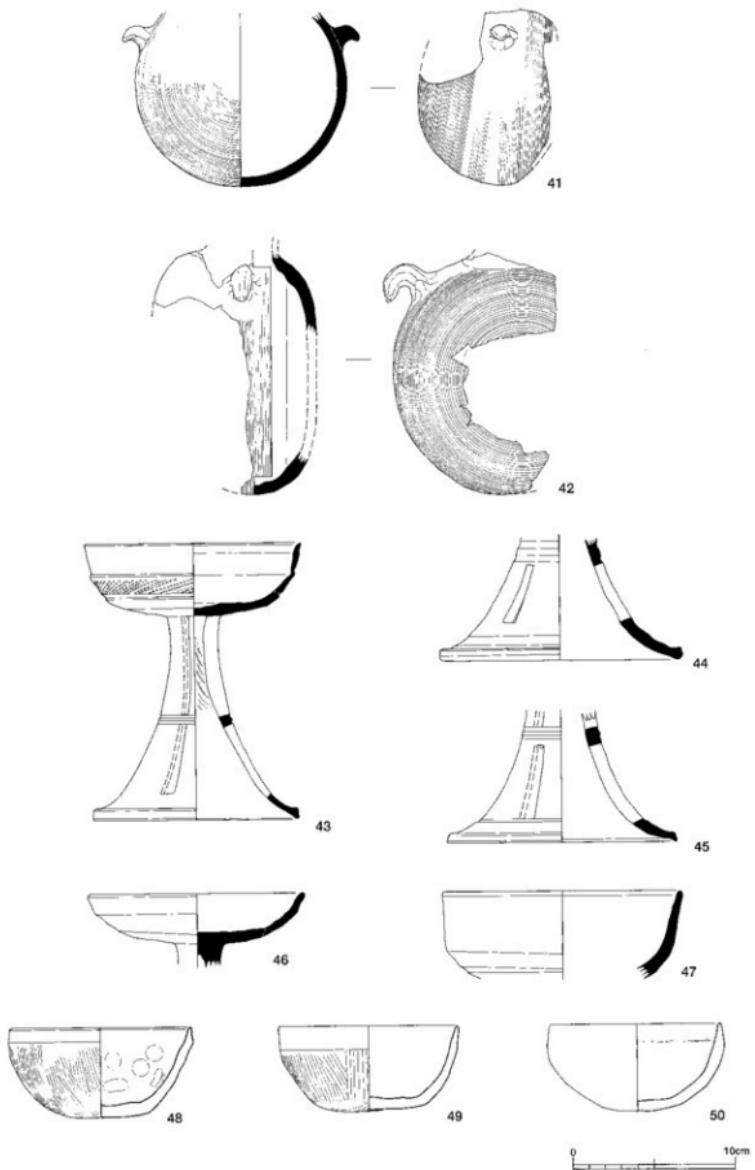
福島13号墳出土遺物(1)

図版7

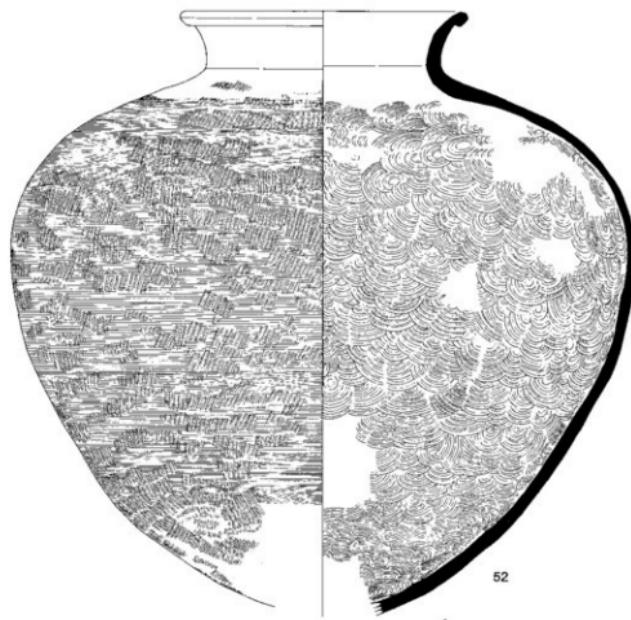
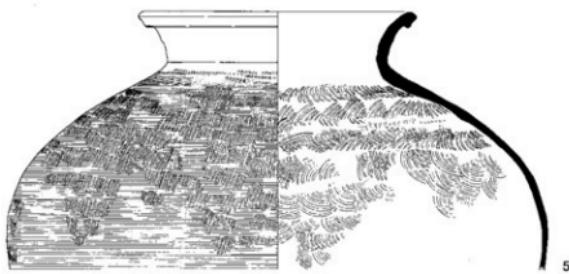


福島13号墳出土遺物(2)

図版 8



福島13号墳出土遺物(3)



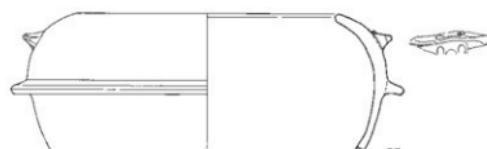
0 20cm



53



54

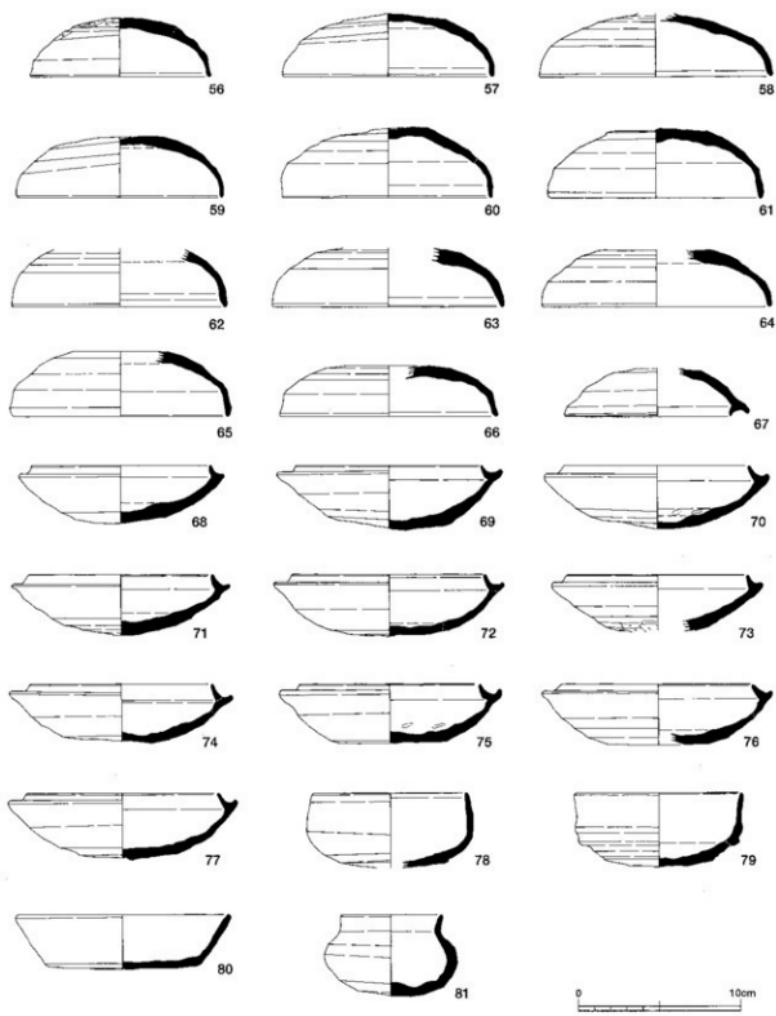


55

0 10cm

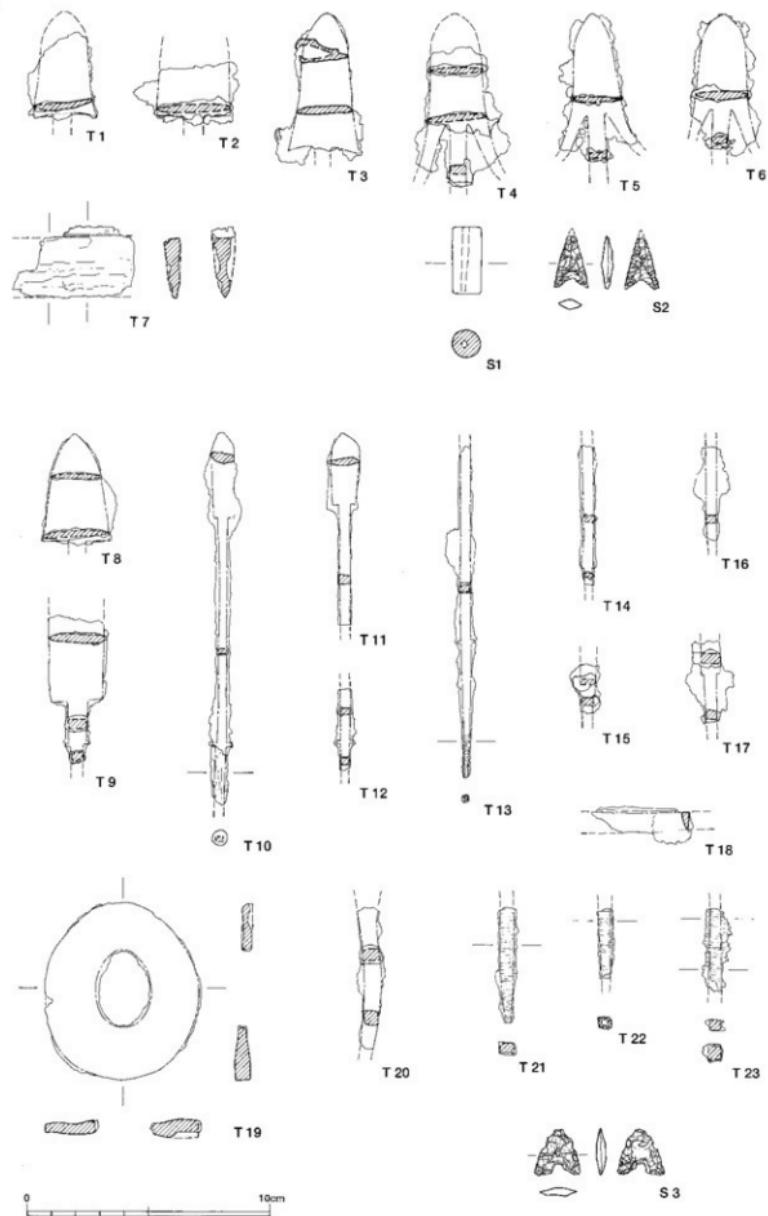
福島13号墳出土遺物(4)

図版10



福島14号墳出土遺物(1)

図版11

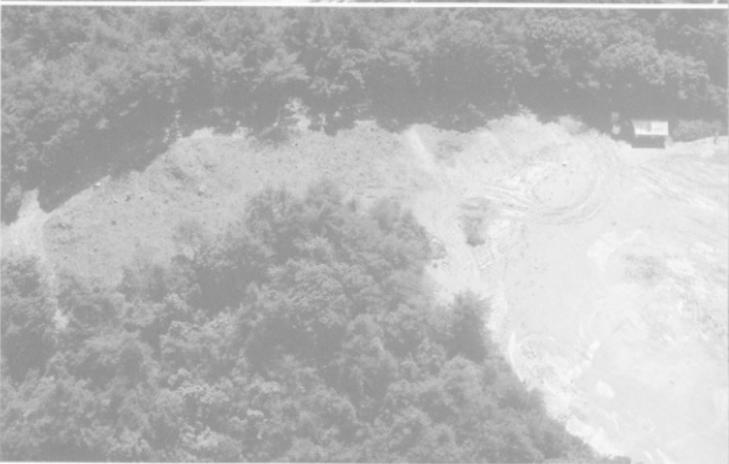


福島13号填出土遺物(5)・福島14号填出土遺物(2)

写真図版



調査地点遠景(1)



調査地点遠景(2)



調査地点遠景(3)

写真図版 2



調査地点遠景(4)



13・14号墳調査前全景



13号墳調査前全景(1)



13号墳調査前全景(2)



13号墳全景(西南から)



13号墳石室(西から)

写真図版 4



13号墳石室(東から)



13号墳

遺物出土状況(西から)



13号墳墳丘断面(西から)



13号墳

全景(墳丘除去後・西から)



13号墳

石室(墳丘除去後・西から)



13号墳石室掘り方(西から)

写真図版 6

14号墳

調査前前景(南から)



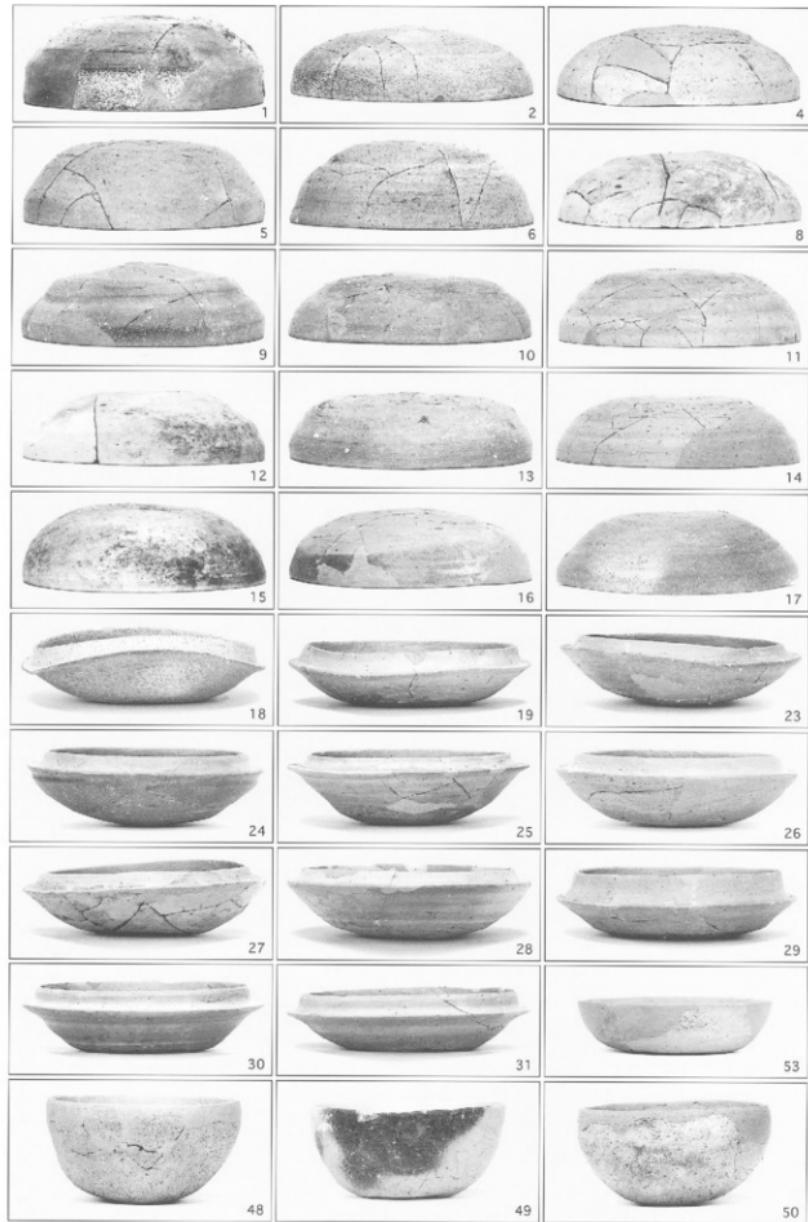
14号墳石室(東南から)



14号墳石室(南から)

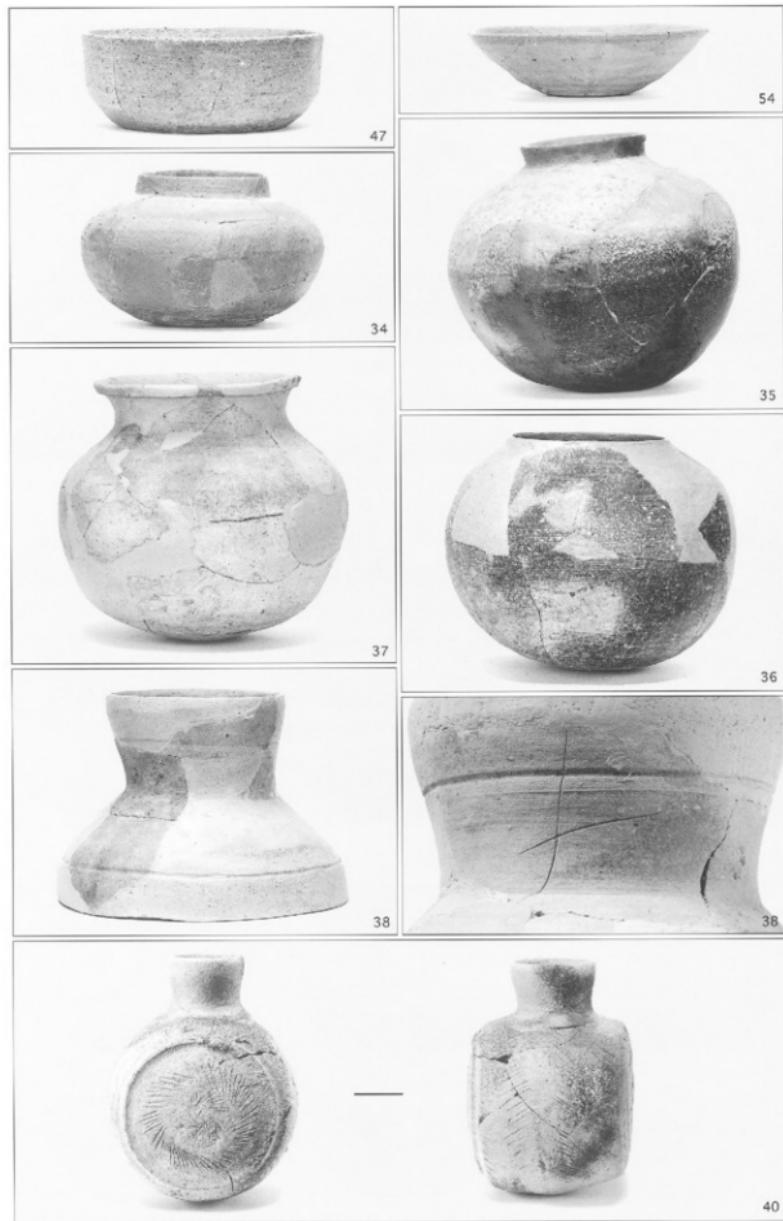


13号墳出土土器(1)

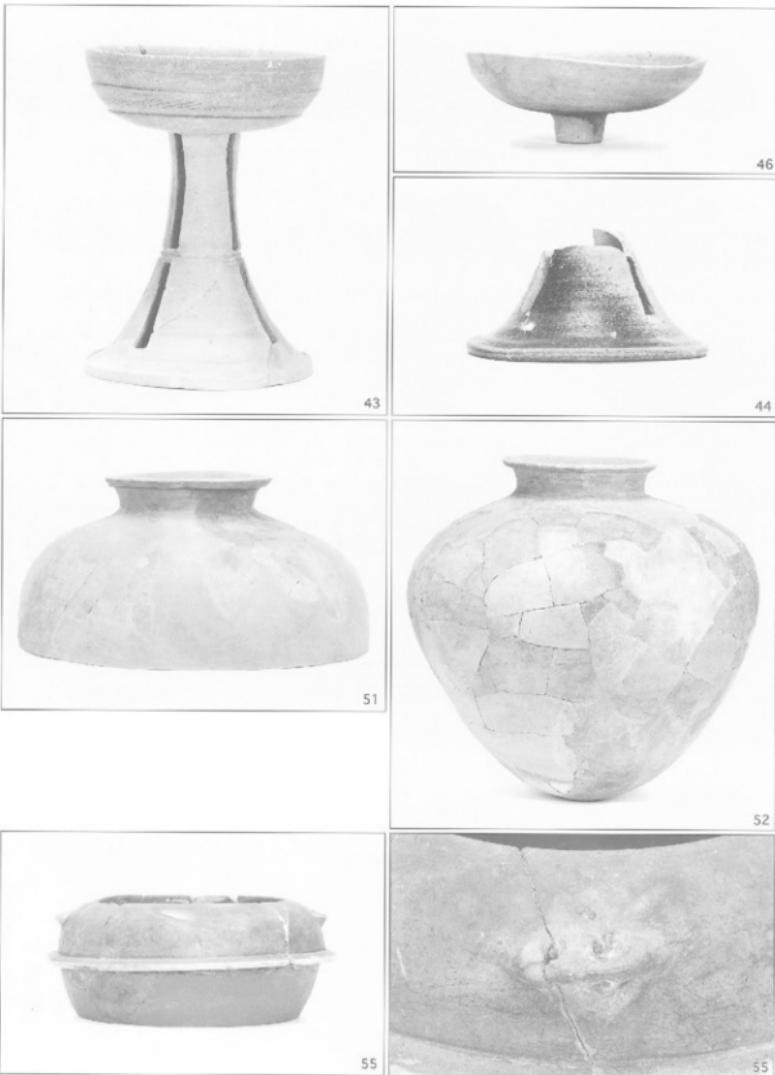


写真図版 8

13号填出土土器(2)

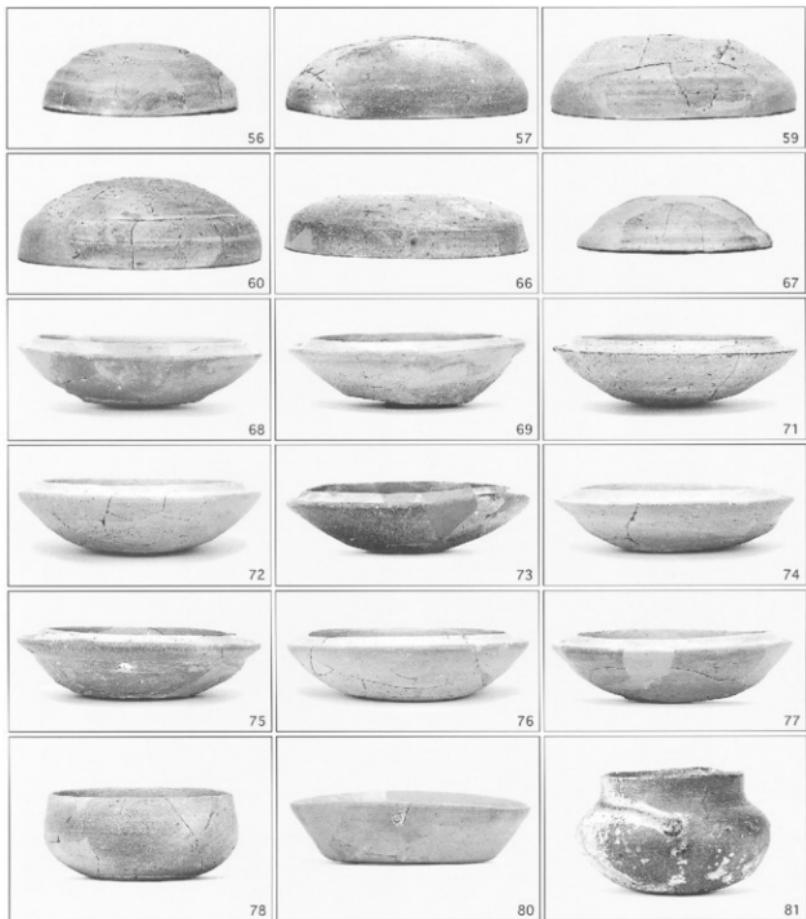


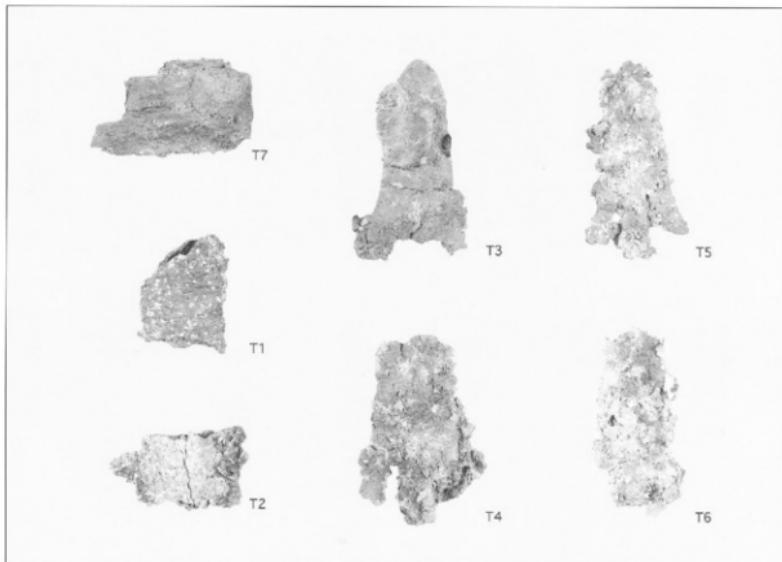
13号墳出土土器(3)



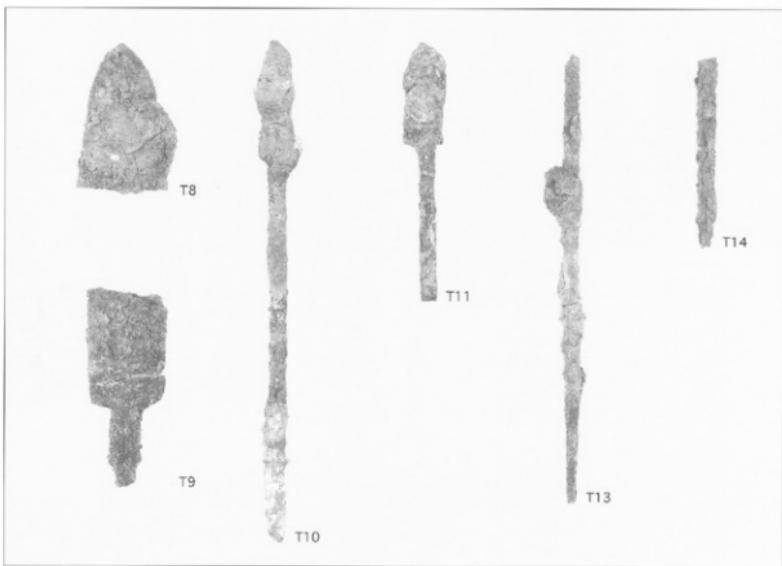
写真図版10

14号墳出土土器



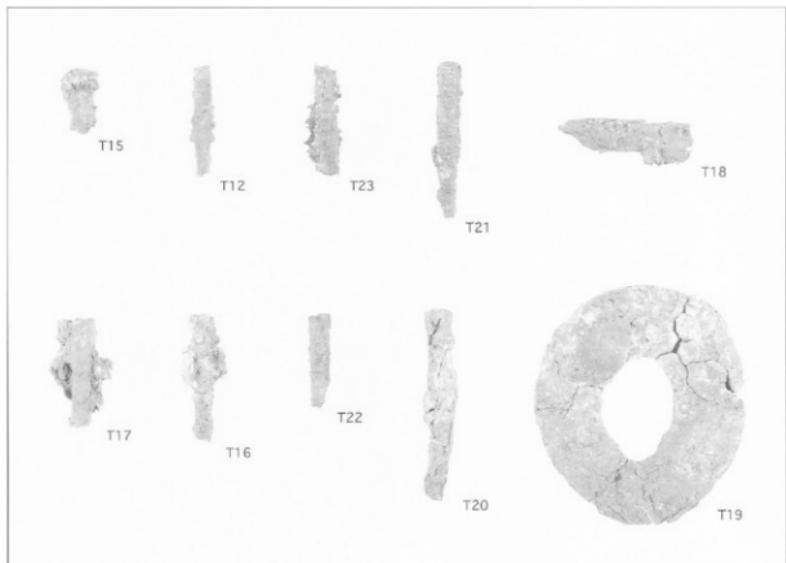


13号墳出土鉄器



14号墳出土鉄器(1)

写真図版12



14号墳出土鉄器(2)



13・14号墳出土玉・石鏃

兵庫県文化財調査報告 第193回

福島古墳群（13・14号墳）

—都市公園整備事業（県立有馬富士公園）に伴う発掘調査報告書—

1999年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

Tel 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 大神印刷株式会社

〒652-0834 神戸市兵庫区木町1丁目4番21号

